

熊澤義宣著『キリスト教死生学論集』

教文館，2005年7月刊，305頁，2,500円(+税)

朴 大信

本書は、病 - 障害 - 老 - 死 - 生にわたる「死生学」について、著者独自の視点から実践的に、かつ神学的に鋭く問い直した論考である。本書「はしがき」で平山正実氏が紹介しているように、著者の故・熊澤氏は旧制第一高等学校で学んだ後、伝道の召命に導かれて神学を志す。専門の組織神学と実践神学では、リッチェル、ブルトマンを経てブルンナー、モルトマンに至る著名な神学者を日本にいち早く紹介した。この間、主として東京神学大学で教授、学長を務めるなど、「およそキリスト教界で考えられる最高のポストを歴任」した著者はまた、その神学の実践的成果として、開拓伝道をはじめ生涯にわたる牧会活動と、心病む人々のためのキリスト教メンタルケアセンター（CMCC）の設立・運営にも献身的にあたった。こうして指導的立場としてある意味華やかに歩んできた「光」の生涯はしかし、同時に「闇」の生涯との伴走でもあったという。1949年、神学の門を叩いた一年目に肺結核に罹患、以後7年間療養生活を強いられる。また著者の最盛期にもあたる1983年には学長に就任するが、わずか2ヵ月後に急性心筋梗塞、その年の暮れには急性心不全で緊急入院と、その後2002年に亡くなるまでに計四回の心臓発作に襲われた。

しかしこの生死の境界、著者の言葉を拝借すれば「無力の極み」、に追いやられたことは、死を見つめて生きることには深い洞察をもたらし、やがて「十字架は病床の下にあるのだ」との本書における象徴的な確信に至らせた。神学的研鑽においても、病苦はその妨げになるどころか、かえって不可欠な根拠と主題となったことを、著者は感謝の念と共に述懐している。こうした確信のもと、特にその後半生は著者独自の神学、即ち伝道の神学と障害者の神学、そして「神学的死生学」の構築と実践のために捧げられた。1997年に定年退職した際の最終講義の題目が「伝道の課題としての死」であったことは、このことを何よりも象徴しているだろう。本書は、こうして著者が自らの苦難を基盤にして拓いていった神学的死生学に関する、学術論文と一般講演録とを集めた論文集であり、また遺稿集である。

本書は第I部「キリスト教死生学」、第II部「福祉の神学」の二部構成からなるが、編者の金子晴勇氏によれば、この二つの主題は「共通した問題意識で結ばれており、全体としてみると前者の主題が後者をも貫いて展開しているので、表題として『キリスト教死生学論集』が採用された」背景を持つ。この二つの主題の下に、各部7本ずつの論考がある。しかし本書の性格上、これら各論考には内容的に部分重複がみられたり、また各々の独立性のゆえ相互の系統的・発展的

継承性が明確に見出しにくい場合がある。したがって本稿では、全体の二部構成の枠組み自体には積極的に依拠しつつ、そのもとに展開される諸論考については、紙幅の問題からも必ずしもその構成順序に沿って逐次紹介することはせず、むしろ第Ⅰ部の主題における主要な幾つかの論点に添う形で、必要に応じて総括／割愛しながら紹介することとしたい。最終的には、著者の「神学的死生学」における思想の全体像と意義、およびその課題とがより明確に提示されるよう努めたい。

まずは第Ⅰ部「キリスト教死生学」における最初の論考、「神学的死生学試論」である。本書の冒頭部分にして、既にここは神学的死生学における真髓と展開を体系的に基礎付ける上で極めて重要な箇所と思われるので、他に比して重点的に紹介する必要がある。

著者はまず、平山氏による「死生学」(Thanatology)の三つの分類を引きつつ神学的死生学の基本的な位置付けを試みる。すなわち、第一は従来の医学の枠組み内でのサナトロジーであり、例えば、「死及び死体に影響を及ぼす諸条件に関する法医学的研究」等に示されるように、それは生命体における死の現象を科学的に分析するものである。第二は、「死を心理学や社会学、精神医学、看護学等の立場から研究しようとする」ものであり、具体的には死にゆく患者の心理や遺族の悲嘆に向き合い、ケアとしての関わりを重視するものである。そして第三は、哲学、倫理学、宗教学、神学、文化人類学等の分野からのそれであって、死生観、埋葬儀礼、遺骨に対する「態度」の比較文化的研究や死の準備教育等がこれに含まれ、充実した生を送るための考察が意図される。

平山氏が以上の三分類を示した後、「我々は生と死の境界を定めることは困難であるゆえ、サナトロジーの研究対象は、死(death)および死にゆく過程(dying)の両面をもっている」と指摘したのを受けて、著者も概ねその趣旨に沿って、神学的死生学を次のように特徴付ける。それは明らかに上の第二、第三の分類を範囲とするものであり、「死という「点」だけでなく、死にゆくことという「線」をも問題」とし、「死に向かって生きること」あるいは「死に向かって生きる人間」に関心を注ぐものである。それはまた必然的に「動的」な性格を持ち、それに従事する者を「主体－客体関係から、主体－主体関係へと変化させずにはおれない」。そして神学的死生学は、第一の分類における医学的・生物学的態度が排除しようとする「神秘性」に立つことによつて成り立つ学問である、とする。

死に向かって生きていくことを見つめる、いわば「線」としての死生学理解を重んずる著者は、続いてこの線についてのあり方を、ルターの死生観に即して一層明確にする。宗教改革者ルターにとっても、死は彼の神学思想の中心であったが、彼は当時のカトリック的死生観が強く根付いていた時代、靈魂の救い、あるいは「律法による義」のために「教会的・ sacramental な司牧の手」が伸ばされてその解決が提供されようとした現実を鋭く批判した。この中世カトリック的な死への解答が、「生の真直中で死にありて生く」ことに要約されるのに対し、ルターにおいてはこの立場を逆転した「死の真直中で生にありて生く」あり方が見出される。さらにこの両者の相違は、ルターの『詩編九十編の講解』では「律法」と「福音」の相違として捉えられており、前者は『生のさ中』にある安心しきった者たちを戦慄させ、他方後者は『死のさ中』にあって…力づける」。著者は以上を踏まえて、神学的死生学は『死のさ中』にあって生のうちに生き、

死のさ中にあってもなおキリストにあって生きるように力づけるこのような『福音』の視点に立つ」とし、さらにそれが見据える「生」とは、「神のうちにその根拠をもつ生命、永遠の生命である」と述べる。

さて、神学的死生学が捉える「線」についてのこうした視点を、さらに神学的／聖書学的に踏み込んで根拠付けるために、ここで著者は「点」としての死そのものについて、一つの重要な見解を示唆する。著者は、人間の死を自明のものとして、あるいは客観的な自然現象等としてみていない。このことは、ルターが人間の死をそれ以外の一切の生物の「自然死」から区別した、その決定的とも言える洞察に依拠するものである。即ち、ルターにおいて「人間の死」は、人間の罪に対する刑罰として神から定められたものとして理解され、それは創世記におけるアダムの墮罪に由来する。一般の生物が自然法則に従って「死ぬ」のに対して、人間の死は神の怒りと裁きによって「殺される」ものとなる。

しかしこのことは逆に、「もしアダムが禁断の樹から食べなかったならば、彼は不死であっただろう」という一つの推論を誘発する。ここで著者は、ルターのこの反証に着目して「ルターにおいては明らかに人間の被造性は本来的に不死性として理解されて」と述べて、その根拠が、人間が「神の像」（創 1:27）として創造されたという、その独自性にあることを示す。従って、著者は人間の被造性が、即その有限性及び死を表すものではないとし、その本来的な不死性を説く。この意味で、人間は自らの神への不従順ゆえその不死性を喪失して「殺される」存在となったのであり、人間の不死性におけるこの肉体的な死を、著者は「第一の死」と呼び、それによって限りあるものとされた生を「第一の生」とする。そして①この第一の死が、実は単なる死ではなく、苦痛、即ち「死のとげ」であることの重要性、また②神の怒りのもとにあつて、なお肉体と生命が与えられてその存在が許されている人間の生の意味を問うこと、この二つが神学的死生学にとって特に重要な主題となることを提示している。

神学的死生学が拠って立つ根拠は、それが「キリスト教」的である限り、イエスの死と復活の出来事に示された福音ということに他ならないが、このイエスの十字架上の死は、紛れもなく「死のとげ」として描写されており、この出来事を「単なる演技」に終わらせないのは、まさにイエス自身の苦しみという、その一点に拠るのだと著者は言う。そして神学的死生学が「線」の事柄として、死に向かって生きる人間を問題とする場合、その生は「第二の生」（復活の生）の光のもとにおける「第一の生」（地上の生）を意味することとなるが、この復活のイエスという光においてこそ、全く「殺される」べきでありながら、なお死を恐れつつ生かされている人間の生の意味が解明されるのであり、そこに創造の本来の意図の完成という神の意図が秘められている、と結論づける。

さて、以上にみた基本的な神学的死生論を基盤として、著者はそこから、その「倫理的射程」を課題とする。ここでは主に、近年医療現場におけるターミナルケア（終末医療）に起因してその重要性が主張される、QOL (Quality of Life) のあり方について中心的に考察される。身体的生命の延命を主目的とする治療医学に対して、ターミナルケアの課題が QOL の向上にあることは、死生学の存在意義にとって重要な関心事といえるが、著者は「神学的」死生学が理解するところの QOL について、特にリハビリテーション医学の上田敏氏の見解と比較しつつ次のように論ず

る。

上田氏は、QOL の Life の訳として一般に用いられる①「生命」②「生活」③「人生」等が、「障害」を意味する ① impairment ② disability ③ handicap 等にそれぞれ対応することを指摘し、QOL のあり方の複合的多様性を示唆する。即ち、①「機能障害」（「欠陥」）をもつ者における「生物学的な生命」、②「能力障害」をもつ者における「個人的な生活」、③「社会的不利」を被る者における「社会的な人生」⁴¹、の質をその指標とし、氏はこれらを「客観的生」と捉えつつ、さらに「主観的」（実存的）な側面にも考察範囲を広げている。著者は、QOL の諸相体系における氏のこうした見解を基本的に支持し、その位相を「客体的な QOL」と「主体的な QOL」と新たに呼んで大別しつつも、上田氏の視点が、やはりその専門的立場から前者に強調されている点を指摘する。そして神学的死生学は、主として後者——「客体的な QOL」の限界の先に立ち現れるものとして——に目を向けることで、生の「質」の「量」的転化に対する批判と QOL の回復（CARE）を目指し、このことは医療技術の進歩（CURE：死の操作／生の操作）のみならず、例えば戦争の遂行、特定の人種における人間物化／非人間化という人間の罪に対して、キリストの恩寵の光のもとにその倫理的射程を見定めなければならない、と括る。

以上、キリスト教死生学を支える核心的思想とその倫理的射程に関して、その神学的展開を試みた著者の論をここまで概観した。しかし本稿冒頭で紹介したように、これらは決して神学的体系のみに依拠するものではなく、著者を幾度も襲った病苦という実存的試練からの確信、そして著者自らが、様々な精神的葛藤に悩む人々に対して実践的に奉仕した蓄積を通じての現実認識、というものに強く裏打ちされるものでもある。この後に続くほとんどの論考は、そうした著者の実存的体験に基づく苦悩と問いが、自身の神学的研鑽の文脈上で「神学的死生学」へと収斂されて結実していく過程と根拠を、具体的に示しているものだと言える。その中で、特に「信仰と生と死」と「病床からのメッセージ」、及び「ターミナルケアとキリスト教」においてそのことが中心に述べられているので、これらをまとめて以下、要点のみ簡単に触れておきたい。

既に病苦体験については冒頭で言及したところであるが、著者はそうした「死の相のもとで（*sub specie mortis*）」、死という人間の避けがたい運命の中に、「キリストの姿が示され、人間の罪と死の彼方に、十字架と復活の出来事を見る視点が確立」された、と述べる。そしてこのことを具体的に語った「病床からのメッセージ」において、著者は次の三つの要点を示す。i) 人は生かされている、ii) キリストは今どこにいるのか、iii) 復活とはいのちの交わりへの神の招きに他ならない。

第一の事柄は、ICU で自分の意志に関わりなく心臓の鼓動というものが運動/停止することに気づいた時、「私を生かすより大きな力」の存在を納得した体験を示している。第二では、絶対安静が命じられ、「無力の極み」にある自分には決して手の届かない、教会の上に立つ十字架というものの「所在」を切実に問うている。社会に対する無力という「無価値」、また神に対する自己本位性という「反価値」、今このいずれをも内包して病床のどん底に沈んでいる自身の現実において、「実はそのどん底の一番下から受止めてくれているものがある」、それこそがあの十字架上で「死のとげ」に悶え苦しんだイエスののだと、自身の信仰体験をここで如実に物語る。著者は、十字架の超越性を肯定しつつ、それが「上」のみならず「下への」超越としても存在する

ものと悟る。そして第三において、そうした無力な自分を「十字架がその下から支えるまでに神が私を生かそうとしている」ことは、「実は永遠に神が私を生かそうとしていること」、「キリストの復活はそのことの保障」なのだ、という著者の結論的確信が導かれる。以上の三つの事柄は、最初の第一における気づきが、第二、第三の確信の意味によって改めて根拠付けられたものと言え、このことにおいて、この第二、第三の確信は、先に述べた神学的死生学の二つの主題に対応して、それらを的確に裏付けているものと評者は考える。

さて、ここまで来て、著者は最後に、被造物としての人間のこのような死生観を、他の被造物とは決定的に異なる「人格的」なものとして改めて明示する。「人格的」といわれるその根拠には、既に示した「神の像」としての人間理解があるが、これは上に見た第三の事柄に示された「永遠」の生（神との和解）、すなわち「不死性」を備えたものである。人間の「人格的」な死とは、人間の墮罪によってこの「不死性」が喪失したことを意味するわけであるから、神学的死生学の貢献は、生きとし生ける全ての被造物に訪れる自然死を受容するための準備や援助ではなく、「不死性」を喪失せしめた人間自身の罪への刑罰としての「人格死」、に対する「究極の慰め」を語ることにあると述べる。著者はこれを、「創造論の地平から和解論の地平へ」と表現する。そしてこの和解論の地平を、「キリストの十字架の出来事において集約的に捉えることが必要」と訴え、しかしこのキリスト論を非キリスト論化していくことによって、「だれ・キリスト論」の構築から、「どこ・キリスト論」へと転換することの重要性を述べている。

以上が第Ⅰ部である。比重をおいて紹介したが、続く第Ⅱ部は、部を新たに隔てているとは言え、その全体論旨としては、第Ⅰ部からの主題、とりわけ今みた「神の像」及び「どこ・キリスト論」の課題を受け継いだものとして管見では理解される。それはまた、先の神学的死生学の「倫理的射程」を文脈化して、さらに実践的に推し進めるための内容とも言える。本書では、主として「障害者⁽²⁾」福祉がその舞台となって展開されるが、中でも、著者は特に「ベテル」での象徴的体験を基に、この課題における論を深める。ここでは、以上の事柄を扱った論考の内、特に「身体性と神学—とくに障害者神学の視点から」、及び「いと小さき者の信仰告白—教会の祭司的役割の問題をめぐる」における概要を中心に示すことで、第Ⅱ部を展望することとしたい。

「身体性と神学」では、著者のベテル体験を通じての基本的洞察が示される。ベテルとは、北ドイツの一大社会福祉障害者施設のことであるが、著者は、かつてそこを見学した際、ある職員が一人ひとりの障害者を指し示すのに用いた言葉で、当初著者には綺麗事とさえ思われた、「わがベテルの宝」という言葉に改めて着目する。それは、かのナチスにおいて障害者もまた虐殺対象となった際、所長はじめ職員達の身を挺しての激しい抵抗⁽³⁾によって、その命が堅く守られたという事実裏付けられる言葉だったからである。このことから、著者はヒトラーの障害者観に潜む能力主義的基準を指摘し、彼らを社会的に無能力な者として無価値化した態度を痛論することで、人間を相対的な「能力」ではなく、その絶対的「存在」においてみるべきだと説く。

ここで著者は、この「存在」とおそらくはほぼ同義で用いている人間の「身体性」について、モルトマン、V. ヴァイツゼッカーに準拠して、肉体(客体)のみならずその精神(主体)との平等的総合として理解するが、この全体的存在としての身体性の価値は、「神の像」としての人間理解に根拠付けられるものとする。換言すれば、その価値は人間の能力によって獲得し得るもので

はなく、その全存在が神に委ねられることで恩寵として与えられるものである。そしてこのことは、神の身体性としてのイエスの出来事、即ちその身体性をもって十字架上で無能力の極みに苦しみ、それゆえその全存在をかけて神に一切を委ねたイエスの姿、において示されるのである。この意味で、著者は、「100%の無能力者こそ、100%神の恵みを受け入れる用意ができています」という福音の逆説をその「存在」をもって示す証人として、障害者理解を語る。そしてこの障害者の存在こそは、競争社会に徹底的な疑念を呈し、共存社会への転換を提起するのだと述べる。

では、この共存社会はいかにして指向されるのか。最終稿「いと小さき者の信仰告白」において、著者は、その「障害」ゆえに自覚的に信仰告白に至り難い者が、まさに教会において排除され「いと小さき者」へと押しやられている象徴的現実を批判しつつ、教会は、個人の言葉・能力による〈我告白〉に先立って、いと小さき者の存在自体を〈我ら告白〉によって担うところにその使命があるとす。そしてこのとりなしは、いと小さき者〈への〉とりなしのみならず、いと小さき者〈からの〉とりなしでもある。著者は、イエスと障害者双方における、無力な身体性としての価値義認を、決して各々相交わることのない事柄として捉えてはいない。とりなす我・我らがイエスの姿を見失う時、いと小さき者はいつも、神の僕として彼らと共に在るイエスの姿を映し出すからである。「私の兄弟であるこれらの最も小さき者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである」(マタイ 25:40)。

以上が本書の概要である。「死生学」を徹底して神学的/聖書学的に洞察しようと努めた著者の功績は、そもそもキリスト教の真髄と使命それ自体が死生学の課題に決定的に関わることを明らかにしたばかりか、著者がまた徹底的に実存的な視点に立脚した姿勢とあいまって、本書に「神学的死生学」として結実したということからも、その意義は大きい。死生学における「外側からの」規範的展開に偏らず、著者自らの実存の苦しみや問いかけに根ざした「内側からの」文脈において、聖書の真理——「下への」超越としてのイエスの十字架——が主体的にここに再受容されていると言える。この十字架とは、救いの根拠としての「象徴」である以前に、身体性の「苦難」そのものである。

こうして、神学的、また実存的な思考に徹底しようとした著者の洞察は、その「真理」を要に、一方でキリスト教における「死生観」を縦軸に据え、他方その横軸として「倫理的射程」を示した。しかし、そうした思考の徹底性は、果たしてどれだけ、「キリスト教」的理解を反映するものとなっただろうか。またその明示性は、それ自体の是非は別として、そこに至る過程でもすれば捨象された事柄との対話をどう捉えるのか。この観点から振り返ると、そこにはやはり幾つかの解消されない疑念が浮かび上がってくる。

第一に、その縦軸における人間の「死」が、一般的な「自然死」とは区別され、「罪の結果」として理解されている点である。著者は、罪による死の理解から、死をおそれ、また生かされていることを認識できるとするが、このことは、死を生命の「自然現象」として捉える仕方からも同様に理解されるとすれば、両者はどのように異なり、またいかに重なり得るのか。死それ自体は罪ゆえ、というこの一点における理解は、本書では註釈においてごく僅かに、それが神学界でも論争となっていることを紹介しているに過ぎない。だがこのことは著者の論の根本に関わるものであり、同時に著者自らが「試論」と断っていることから、「キリスト教」的たる充分な批

判的検討と根拠をもって、慎重に展開される余地の残るところだろう。またこのことと関連して、本書は全体を通じて、基本的に「神学的」観点から死生学を論ずることがその主目的であるため、他宗教や非・反宗教者に対する配慮や対話に関してはやはり乏しいと言わざるを得ない。特に日本の一般的精神風土を、神々—人間—自然における「汎神論的」・「横型」のそれとして特徴付けた著者の、批判的かつ建設的な比較考察はもっと積極的であってよいだろう。

第二は、横軸としての「倫理的射程」についてである。概要では触れなかったが、例えば QOL や生命倫理に関わって今日重要な課題となっている脳死・臓器移植問題において、著者は脳死判定の基準が困難な状況にあるのに加えて、先に示した霊肉二元論とは異なる身体性の理解から、従って「人間物化」への危惧から、臓器移植には批判的である。しかし一方で、尊厳死については、安楽死が積極的な「死」の選択であるのに対し、それが「死に方」の選択（生命操作への拒否権）であり、「人生の終局の方式を選択する自由と責任は人間に与えられる」として、一定の理解を示している。しかしこのことは、著者が人間の「存在」・「身体性」を「神の像」としてことのほか強調してきた立場と照らし合わせると、その「放棄」ともみえる著者の見解には整合性が保障されるのか。

そして第三は、今みた「倫理的射程」における「他者性」に関わるものである。果たして、ここで語られる神学的死生学の横の座標軸には、「状況」という第三の指標がどれだけ重ね合わせられているか、ということである。これが評者の最大の問いであり、本書で最も語られていない視座なのではないか。著者の示した横軸としての倫理的射程には、確かに縦軸の死生観においてある態度決定をした者が、次の段階として、他者、特に「いと小さき者」との連帯へと促される指標が示されている。それは、著者が特にキリスト教会への自己批判をしてまでも重視した意義ある指標であり、また「神学的」（神の）意図と招きでもある。だが、その他者は「神の像」であると同時に、果たして「実存的状況に身を置く他者」としても捉えられているだろうか。あるいは、自己の他者への関わりにおいて、その自己は「語る」前に、まずその他者の声（痛みや志し）、時に声にならない声、を「聴」こうとしているだろうか。そしてそのような対話を通じて、具体的に生成され続ける「状況」から改めて問われるものに、当事者らはどれだけ耳を傾け、またそれに突き動かされようとしているか。

以上のことは即ち、限りなく善意や使命に基づいた他者への指向や連帯、奉仕であっても、それがどこまでも自己の側の理屈における、「抽象的な他者像」への応答に留まっていないかどうかへの吟味である。著者の示す、線としての「動的」な死生学のあり方は、今、ここにある「具体的状況」としての倫理的射程においても自ずと反映されるべきものであろう。倫理的主体として、その相対している他者や状況との対話・関わりの中で生起する「ふさわしさ」の価値——「正しさ」ではなく——を、（苦を伴いながらも）選択・決定し、共有しようとする、その営みにおいて、より確かな共生の兆しも開かれてゆくことだろう。著者の示す「下への」十字架は、そうしたあり方においてもなお、否、そうしたあり方にこそ、積極的な根拠と意味を与え続けるものと理解し得るのではないだろうか。

本書は、「死生学」においてキリスト教的展開を試みることで、その独自の方向性と意義を積極的に提示した。このことはまた、その展開の枠組みが捉えきれなかった、もしくはさほど想定していなかったこととして、死生学が自ら内包すべき着眼点や、死生学における多様な価値観の

開かれた相互対話の必要性、というものも暗に浮き立たせました。「死」と「生」の事柄に切実に関わる多様な領域・現場からの模索と相互交流が、その成熟が待たれて止まない死生学の構築に向けて、今後さらに縦横に行われることを願うものである。

註

- (1) 上田氏は、リハビリテーションの究極的な目標が③の「社会的不利」の克服にあると考え、これら三つの相互関係には、①が②を引き起こし、②がさらに③を引き起こすといった因果関係が基本的にはある、とする。
- (2) 著者は、従来の障害者（同様に健常者も）という言葉の問題性を指摘しつつ、それに代わる相応しい言葉が見つからない状況では、便宜的に鍵括弧付で用いざるを得ないとしている。本稿では特に鍵括弧を付していない箇所があるが、その場合も基本的に著者のそうした意図に沿う言葉として使用される。
- (3) 「障害者を殺害（安楽死）するなら、まず、我々を殺してからにして欲しい」との本書の証言記録から。ヒトラーは戦争遂行の為に、「無能力な障害者」達に施される食料や人的資源を我が手に収めようとした。なお「ベテル」という名は、旧約聖書の創世記(12:8 ほか)に出てくる地名に由来し、「神の家」を意味する。